

楔形文字スペリングの言語学的解釈

— 3つの事例 —

吉田 和彦

1. はじめに

文字が特定の言葉を書き表し、コミュニケーションを行うための手段であることは言うまでもない¹⁾。そして、文字自体は言葉を伝達するための道具にすぎない。したがって、話し手のいない文献言語の研究においては、文字とその背後にある言葉の組織との関係を解明することが常に重要な課題となる。しかしながら、この課題を達成することは決して容易ではない。本稿で取り上げるヒッタイト語や楔形文字ルウィ語に代表される古代アナトリアの印欧系楔形文字言語の研究の場合には、アルファベット（単音文字、音素文字）で書かれた他の印欧語の場合にはみられない解釈上の困難がたねにつきまとう。

ヒッタイト語と楔形文字ルウィ語の文献資料は、紀元前2千年紀に遡り、いずれも楔形文字で記録されている。これらの言語の音韻研究は、発掘された楔形文字粘土板資料に基づいて進められなければならない。しかしながら、粘土板に刻まれている楔形文字は、印欧語とは違った言語構造を持っていたシュメール・アッカドの楔形文字を借用したものであり、印欧語の音素配列を書き表すにはいくつかの点で欠陥があった。

楔形文字は表意文字以外に音節文字として使用され、ひとつの楔形文字は V、CV、VC、CVC という音節のいずれかを表している。ところが、楔形文字で語頭と語末の2子音以上の連続や語中の3子音以上の連続を書き表そうとするならば、どうしてもそれらの子音と合わせて、本来そこには存在していない母音を含めざるをえない。一方、印欧語には語頭と語末の2子音連続や語中の3子音連続が広く認められる。したがって、印欧語に特徴的な音素配列を楔形文字の文字体系で忠実に書き表すことは不可能である。

¹⁾ 本稿の一部は、2001年11月9、10日にカリフォルニア大学ロサンゼルス校で開催された13th Annual UCLA Indo-European Conference、および2001年12月1日に京都産業大学で開催された第8回西アジア言語研究会で発表したものである。それぞれの機会において、有益なご意見をくださった参加者の方々にお礼申し上げたい。

楔形文字体系に内在するこの限界は、音韻的な解釈を行うときに大きな障害となる。何故ならば、起源的には子音連続のなかに存在していなかったとしても、母音が後に挿入されることは十分考えられるからである。つまり母音が書かれているのが表記上の限界によるのか、あるいは実際にその母音が読まれていたのかを決定することは、多くの場合困難である。問題となる母音が見かけだけで実際には発音されていなかったという解釈を有力にする手掛かりとして、たとえばつぎの4つが考えられる²⁾。

1) CV を表す文字が VC を表す文字と交替して用いられている場合、この文字に含まれている母音は発音されていなかった可能性が高い。たとえば、*ki-iš-šar-ta* “with the hand (instrumental sg.)”は、*ki-iš-šar-at*とも綴られ、*ta*が*at*と交替するので、おそらく/*kissard*/を表している。

2) CV あるいは VC という文字に含まれている母音が別の母音と交替する場合、それらの母音は発音されていなかった可能性が高い。たとえば、*ma-li-it-tu* “sweet”は、*mi-li-it-tu*とも綴られ、最初の文字が*ma*でも*mi*でもよいので、おそらく/*mlitu*-/を表している。

3) 子音のあいだに母音がかかれている場合と書かれていない場合があるならば、その母音は発音されていなかった可能性が高い。たとえば、*li-in-kat-ta* “(s)he swore”は、*li-ni-ik-ta*とも綴られ、*n*と*k*および*k*と*t*のあいだに母音がある場合とない場合がみられるので、おそらく/*linkta*/を表していた。

4) CV-VC ではなく、VC-VC あるいは CVC-VC と綴られる場合、VC という文字に含まれる母音は発音されていなかった可能性が高い。たとえば、*da-ma-aš-zi* “(s)he presses”は/*dmastsi*/を表しているのに対して、*ua-al-aḥ-zi* “(s)he strikes”や*kar-aš-zi* “(s)he cuts”は、おそらくそれぞれ/*walḥtsi*/と/*karstsi*/を表している。

以上のうち1)～3)は、母音の種類や位置に関して、特定の形式に2つ以上の異なった綴りがみられる場合、別の違った解釈を裏付ける強い根拠がない限り、その母音は見かけ上のものとして理解するという立場に基づいている³⁾。

しかしながら、綴りが一定であり、うえに見られるような揺れがない場合、母音がいかに読まれていたかどうかを決定することは難しい。この場合も、反対の解釈を支持する独自の共時的な言語学的根拠がない限り、その母音は発音されて

2) Melchert (1994: 29f.)をみられたい。

3) 同じ考え方が Melchert (1997: 177)にもみられる。

いなかったと解釈するほうが手堅い分析と言えるであろう。たとえば、“forth”を意味する形式は一貫して *pa-ra-a* と綴られている。この形式はラテン語の *pro* やギリシア語の $\pi\rho\acute{o}$ と歴史的に結び付けられるので、[pará:]ではなく、語頭の2子音連続がそのまま保持されたままの[prá:]と読まれていたと考えるほうが無理がない。つまり、*p* と *r* のあいだに挿入された *a* は、語頭で2子音連続を表記できないという楔形文字のシステムの限界によるものであり、実際には読まれていなかったと考えたい⁴⁾。

本稿では、綴りに揺れがみられないけれども、その音韻的解釈について研究者の見解が分かれている3つの事例について、筆者自身の考えを述べたい。その3つの事例とは、子音語幹動詞に付与されるヒッタイト語の3人称単数過去語尾-*ta*、子音語幹動詞にも母音語幹動詞にも付与される楔形文字ルウィ語の3人称単数過去語尾-*ta*、そして楔形文字ルウィ語の3人称複数過去語尾-*nta* である。以下の節では、問題の所在を明確に示した後、それぞれの動詞語尾にみられる末尾母音 *a* が実際に発音されていたのか、そうでないのかという問題について、当該言語内部にみられる関連する現象や比較言語学的な根拠を示しながら順に論じてみたい。

2. 問題の所在

ヒッタイト語と楔形文字ルウィ語の3人称単数過去語尾-*ta* と楔形文字ルウィ語の3人称複数過去語尾-*nta* の末尾にみられる *a* がダミーではなく、実際に発音されていたという見方は、Eichner (1975: 79f.)にもっともはっきりとみられる。彼の見方によれば、語末の*-*t* はアナトリア祖語の段階に子音の後で規則的に脱落した。この音変化は子音語幹に付与される *mi*-動詞語尾の3人称単数過去*-*t* と3人称複数過去語尾*-*nt* にも作用したが、これらの語尾の末尾の*-*t* は補助母音 (Stützvokal) である *a* ([a]あるいは[ə]) をともなって、-*ta* と-*nta* というかたちで復活した。

3人称単数過去形 **ept* > **ep* → **epta* “(s)he took”

3人称複数過去形 **appant* > **appan* → **appanta* “they took”

この形態変化を動機づけたのは、うへの音変化の影響を蒙らなかった母音語幹動詞からの類推である。まず類推は3人称単数過去形に働いた。

4) Melchert (1994: 30)を参照。

**lūketi* “(s)he kindles” (3人称単数現在) : **lūket* (3人称単数過去) = **epti*
 (3人称単数現在) : X (3人称単数過去)
 X = **ept* (→ **epta*)

つぎに、こうして新たにつくられた3人称単数過去形**ept* (→ **epta*) から3人称複数過去形**appant* (→ **appanta*) がやはり類推によってもたらされた。

**epti* (3人称単数現在) : **ept* (3人称単数過去) = **appanti* (3人称複数現在) : X (3人称複数過去)
 X = **appant* (→ **appanta*)

さらにアナトリア祖語からヒッタイト語や他の言語が分岐した後、共通ルウィ語の段階で語末の*-*t* が母音の後で脱落するという音変化が起こった。この音変化は母音語幹動詞の3人称単数過去形に作用した。しかしこの場合も、やはりいったん脱落した*-*t* は、この音変化を受けなかった子音語幹動詞（たとえば楔形文字ルウィ語 *āšta* “(s)he was”）からの影響によって、補助母音をともなった*-*ta* というかたちで復活した。母音語幹動詞である楔形文字ルウィ語、たとえば *aqita* “(s)he came” は、このようにして成立した。

Eichner は、以上のプロセスを経てもたらされた過去語尾-*ta* と-*nta* には、いずれの場合も末尾に補助母音 *a* が含まれていると考えている。起源的には存在しなかった補助母音はこれらの動詞語尾に付与された時期は、うえてみたように、ヒッタイト語の3人称単数過去語尾-*ta* と楔形文字ルウィ語の子音語幹に付く3人称単数過去語尾-*ta*、さらに同じく楔形文字ルウィ語の3人称複数過去語尾-*nta* の場合はアナトリア祖語の時期であり、楔形文字ルウィ語の母音語幹に付く3人称単数過去語尾-*ta* の場合は共通ルウィ語の時期としている。いずれの場合も、補助母音 *a* の付与により、語尾末の *a* は実際に発音されていたと考えている。

以上の Eichner の見方には、いくつかの点で問題がある。まず最初に、Eichner は語末に添加された挿入母音 *a* の音価を /a/ あるいは /a/ とみなしているが、これは正しくない。従来、印欧祖語の5母音体系は、アナトリア祖語で **o* が **a* に融合した結果、**a*、**e*、**i*、**u* の4母音体系になったと考えられていた。しかしながら、Melchert (1992) はウムラウトの影響を受けなかったことが確実なリュキア語の形式に注目することによって、アナトリア諸語の母音につぎの2つの対応があることを明らかにした。

リュキア語 *a* = ヒッタイト語 *a* = 楔形文字ルウィ語 *a* = 印欧祖語**a*
リュキア語 *e* = ヒッタイト語 *a* = 楔形文字ルウィ語 *a* = 印欧祖語**o*

後者の対応は、たとえば、つぎのような例にみられる。リュキア語 *ñte* ‘into’ = ヒッタイト語 *anda* = 楔形文字ルウィ語 *ānda* = 印欧祖語**endo* (= ラテン語 *endo*)⁵⁾。すなわち、アナトリア祖語の段階では印欧祖語の5母音体系がなお存続していることが分かった。したがって、ここで問題にしているヒッタイト語と楔形文字ルウィ語の3人称単数過去語尾 *-ta* と楔形文字ルウィ語の3人称複数過去語尾 *-nta* は、リュキア語の *-tel-tē* と *ⁱtel-ⁱtē* に対応するので、それぞれ印欧祖語の**-to* と**-nto* に遡ることになる。つまり、語末に付与された補助母音は、*/a/*でも*/o/*でもなく、*/o/*ということになる。しかしながら、一般に言語類型論的な立場からは、*/o/*が挿入母音 (epenthetic vowels) として現れることはまれである⁶⁾。

2番目の問題として、Eichner が考察の対象にしているのは *mi*-動詞の3人称過去語尾だけであり、*hi*-動詞や中・受動態語尾を含む総合的な視点が欠けている点があげられる。Eichner 自身も、彼の見方によるとアナトリア祖語の時期につくられた3人称複数過去語尾**-nta* が、ヒッタイト語で *hi*-動詞語尾 *-er* に取って代わられていると述べているが、そのプロセスは明確に示されていない。さらに、ヒッタイト語の *-er* に対応する語尾が他のアナトリア諸語にみられない理由、および中・受動態の3人称過去語尾 (単複両方) がやはりヒッタイト語以外の言語で欠けている理由が判然としない。

3番目の問題としてあげられるのは、語末の補助母音の存在が *li-in-kat-ta* “(s)he swore” に代表されるスペリングによって保証されると考えている点である。この見方は、Oettinger (1979: 9⁶, 237)、Melchert (1994: 175f.) そして Kimball (1999: 193f.) によっても支持されている。彼らの根拠は、語末の母音がダミーであるならば、*li-in-ka-at* で十分であるはずなのに、実際には *li-in-ka-at* というスペリングが一例も記録されていないという点にある。しかしながら、彼らの解釈が *li-in-kat-ta* と

5) Cf. Melchert (1992: 46).

6) Kager (1999: 124) は、“epenthetic segments tend to be realized as the ‘minimally marked’ segment, ...” と述べている。これは、最適性理論の立場からの言明であり、忠実性 (faithfulness) の原理に違反する場合でも、[+low, +back, +round] というような有標の母音 */o/* が挿入されることはないという主張である。しかしながら、挿入母音として */o/* がまったくみられないわけではない。たとえば、Jay Jasanoff 教授から受けた指摘であるが、トカラ語 B では特に韻律テキストに、いわゆる “bewegliche -o” が顕著にみられる (cf. トカラ語 B *akālk(o)* “desire”、トカラ語 A *ākāl* “id.”)。

いうスペリングから引き出される唯一の解釈ではない。そして実際に、次節で示されるように、別の違った解釈を提出することが可能である。

以下の第3節ではヒタイト語の3人称単数過去語尾-*ta*、第4節では楔形文字ルウィ語の3人称複数過去語尾-*nta*、第5節では楔形文字ルウィ語の3人称単数過去語尾-*ta* に対して具体的に考察を試みる。

3. ヒタイト語3人称単数過去語尾-*ta*

ヒタイト語の *mi*-動詞3人称単数過去語尾としては、-*ta* と *-t* という2つの形式がある。一般に-*ta* は子音語幹動詞に (e.g., *e-eš-ta* “(s)he was”)、*-t* は母音語幹動詞に付与される (e.g., *i-e-it* “(s)he made”)。伝統的な見方では、-*ta* に含まれている末尾の *a* は見かけだけで実際には発音されていなかったとみなされている⁷⁾。この見方の背後にあるのは、楔形文字表記では語末の2子音以上の連続が書き表わせないために、子音語幹に付く-*ta* の *a* はダミーであり、印欧祖語の2次語尾 **-t* がそのまま保持されているという考え方である。すなわち、第1節でみたように、独自の言語学的根拠がない限り語源的な解釈を優先しようという考え方、つまり歴史的に古い状態がそのまま保持されているとみなす考え方である。しかしながら、このような慎重な立場を貫こうとしている Melchert でさえ、この場合については、以下の言明にみられるように、-*ta* という文字に含まれている *a* は実際に読まれていたと主張している。

“I follow Eichner & Oettinger in assuming a secondary “prop vowel” in pret. 3rd singulars like *ēpta* ‘took’ < **ēpt*, ... The reality of the vowel is supported by the spelling *e-ku-ut-ta* for *lég^wta* ‘drank’, where ***e-ku-ut* would have been sufficient to spell a real ***/ég^wt/*, and by *hi-in-kat-ta* ‘presented’ and *li-in-kat-ta* ‘swore’.” (Melchert 1994: 176)

すなわち、Melchert は、*e-ku-ut-ta*、*hi-in-kat-ta*、*li-in-kat-ta* などにみられる末尾に付けられた-*ta* という文字が語源的にはなかった補助母音の存在を裏付ける決定的な根拠として受け止めている。しかしながら、これらの形式に付与されている-*ta* に対して、まったく違った解釈を施すことが可能である。

はじめに2つの重要な事実を指摘したい。まず、一見余分に付与されているように見える-*ta* によって特徴付けられる動詞語幹には共通の特徴がみられることである。-*ta* が現れるのは、子音動詞語幹のうち、語幹末に子音連続を持つもの

⁷⁾ Pedersen (1938: 98)、Sturtevant (1951: 141)、Kronasser (1956: 31)などをみられたい。

か (e.g., *hink-*, *link-*)、唇軟口蓋音 (labiovelar) を持つもの (e.g., *eku-*/*eg^w-*) に限られている。*hi-in-kat-ta* や *e-ku-ut-ta* によってそれぞれ代表されるこれらの2つのタイプについては、スペリングのうえで語尾の直前に母音 *a*、*u* が書かれている。しかしながら、これらの母音のいずれも実際には読まれていなかった。語幹末に子音連続を持つタイプについては、子音で始まる語尾が付く場合、3子音連続が生じるが、楔形文字書記法では3子音連続を忠実に書き表わすことができない。したがって、スペリングではダミーの母音を差し挟まざるをえない。また、*e-ku-ut-ta* に代表される語幹末に唇軟口蓋音を持つタイプについても、同様である。*e-ku-ut-ta* に含まれる *ku* という文字は印欧祖語の唇軟口蓋音/*g^w/*を継承している⁸⁾。*/g^w/*が継承されていることは、1人称複数現在の *e-ku-e-ni* (*legweni*/*<*eg^wweni*) という形式によって保証される。もし/*g^w/*が/*gw/*になっていたならば、*e-ku-um-me-ni* (*<*eguweni*) という形式が1人称複数現在形として予想されるが、そのような形式は実在しない⁹⁾。要するに、*hi-in-kat-ta* や *e-ku-ut-ta* というスペリングは語尾の前に母音を含んでいるが、いずれの場合もその母音は実際には発音されていなかった。

2番目の注目すべき事実は、語末に付与される文字はつねに *ta* であるという点である。もしも補助母音が本来の語尾に付加されているならば、*ta* の代わりに *a* という文字も使われてよいと考えられるが、実際に用いられているのは *ta* に限られている (***hi-in-kat-a*、***e-ku-ut-a*)。したがって、スペリングのうえでは *t* が母音間でつねにダブルで現れていることになる (*hi-in-kat-ta*、*e-ku-ut-ta*)。

さて、母音語幹動詞の3人称単数過去形に母音で始まる後倚辞が付与されるとき、語尾-*t* はシングルで綴られる (e.g., *pait-aš* “went-(s)he”)。一般に、ヒッタイト語では印欧祖語の無声閉鎖音は母音間においてダブルで書かれるが、有声閉鎖音はシングルで書かれる (**t* については-*tt*-あるいは-*dd*-、**d* については-*t*-あるいは-*d*-と書かれる)。これは、いわゆる「スタートヴァントの法則」としてよく知られているが、うえの *pait-aš* /*päid-as/* という例で語尾-*t* がシングルで書かれていることから分かるように、ヒッタイト語では語末の閉鎖音が弱化している (**-t* > **-d*)。この語末閉鎖音の弱化はおそらく母音の後でのみ生じたと考えられる。その理由は、子音の弱化は直前の母音によって引き起こされることが多いからである。たとえば、古ラテン語の3人称単数の2次語尾-*d* (*<*-t*) は母音で終わる動詞語幹においてのみみられる。*esed* 「*sum* “I am”の3人称単数未来形 (歴史的には接続法)」、*feced* 「*facio* “I make”の3人称単数完了形」、*sied* 「*sum* の3人称

⁸⁾ 実際には、語尾の-*t* からの逆行同化によって、[*k^w*]と読まれていたに違いない。

⁹⁾ Cf. Lindeman (1965: 30).

単数接続法（歴史的には希求法）」。これに対して、直前に子音がある場合には、語末の閉鎖音は脱落する（e.g., *lac* ‘milk’ < *lact*）。また、他のイタリアック諸語でも、語末の閉鎖音は直前に子音がある場合と母音がある場合とでは異なる変化が生じている。たとえば、子音語幹に語尾*-tが付いたウンブリア語 *fust* “erit”に対して、母音語幹に*-tが付いたオスク語 *fusíd* “foret”の場合には弱化がみられる。これらの事実に基づけば、ヒッタイト語にみられる語末閉鎖音の弱化も子音の直後では生じなかったと考えることができる。以上の考察を踏まえると、うえて論じた *hi-in-kat-ta* のタイプ（語幹が2子音連続で終わるタイプ）と *e-ku-ut-ta* のタイプ（語幹が唇軟口蓋音で終わるタイプ）に対して、Eichner や Melchert などが示した見方とはまったく異なる解釈が引き出される。すなわち、*ta* が余分に付与されていないならば、***hi-in-kat* や***e-ku-ut* というスペリングになり、直前に母音がかかれていたために末尾の閉鎖音が弱化を受けていると受け取られかねない。したがって、ヒッタイトの書記たちは、これらの2つのタイプの動詞に付与される-tという語尾が弱化されていないということをスペリングのうえて明瞭に示すために、*ta* という文字を余分に付けたという解釈である¹⁰⁾。

この新しい解釈は、類型論的な立場およびヒッタイト語史的音韻論の立場からみると十分に妥当と言えるが、これにより強い説得力を与えるには、ヒッタイトの書記が同様の目的で子音をダブルで綴ったと考え得る別の独自の根拠を示す必要がある。以下では、実際にそのような根拠がヒッタイト資料内部にあることを示したい。

再帰を表す後倚辞-Vz/-za が文連結詞 *nu* に付くとき、通常 *nu-za* と綴られる。この *nu-za* というスペリングは後期ヒッタイト語ではほぼ一般化されているが、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板では、その例はあまり多くない¹¹⁾。これ

¹⁰⁾ ダブリングによって子音が弱化されていないことを示すやり方は、楔形文字を使用する言語だけの特徴ではない。たとえば、古期アイルランド語にも並行例がある。*do-beir* と綴られる形式を例にあげると、接頭辞の後の *b* が弱化している場合は関係形 (relative form) になり、“who bears”あるいは“bears whom”を意味するが、*b* が弱化していない場合は定動詞になり、“(s)he bears”を意味する。両者を区別するために、テキストによっては後者が *do-bbeir* と綴られている。子音のダブリングと子音の非弱化の問題については、Greene (1956)に詳しい。この重要な論文の存在をご教示くださった Joseph Eska 教授にお礼申し上げたい。

¹¹⁾ 古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板で、*nu-za* の例は KBo VI 2 I 15、KBo XXV 103 I 2、KUB XXXI 143 II 8、KUB XXXI 143 II 15、KBo XXV 54 I 15 にみられる。KBo と KUB は、それぞれ *Keilschrifttexte aus Boghazköi* (Berlin)と *Keilschrifturkunden aus Boghazköi* (Berlin)という粘土板テキストの略である。

に対して、古期ヒッタイト語では *nu-uz* と *nu-uz-za* という別のスペリングが多くみられる¹²⁾。さらに、古期ヒッタイト語には、再帰小辞が *nu* ではなく、*ta* という *nu* よりも古い文連結詞に後接する *ta-az* という形式が記録されている¹³⁾。ここで注目したいのは、機能は同じである文連結詞 *nu* と *ta* に後倚辞が付与するとき、スペリングのうえでギャップがみられることである。*nu-uz*、*na-aš* “and-(s)he”、*na-an* “and-him (her)”などに対応する *ta-az*、*ta-aš*、*ta-an* などは記録されている。しかしながら、*nu-uz-za* に対応する ***ta-az-za* は一例も記録されていない。このギャップを理解することは困難ではない。*-za* がより新しい文連結詞である *nu* を含むスペリングにはみられるが (*nu-uz-za*)、より古い *ta* を含むスペリングにはみられないことから、*-za* が付与されたのは古期ヒッタイトの比較的新しい時期であり、*nu-uz* のほうが *nu-uz-za* よりも古いスペリングであったと考えられる¹⁴⁾。

それでは、ヒッタイトの書記は何故 *nu-uz* に *za* という文字を付与するようになったのであろうか。*za* に含まれている *a* はダミーであるために¹⁵⁾、*nu-uz* と *nu-uz-za* のあいだに言語変化は考えられない。したがって、両者の違いはスペリングだけの違いであると考えられる。新しい *nu-uz-za* というスペリングによって、一体書記は何を表そうとしたのであろうか。納得のいく答は、新たに *za* を付与

¹²⁾ *nu-uz* は KBo XVII 36 III 11 (OH)、KBo III 40, 2 (OH++), KBo XX 22 I 10 (OH)、KBo XVII 33, 4 (OH)、ABoT 35, 8 (OH)に、*nu-uz-za* は KBo VI 2 I 6 (OH)、KBo VI 2 I 47 (OH)、KBo VI 2 II 7 (OH)、KBo VI 2 II 32 (OH)、KBo XXII 2 Vs. 12, 13, 17 (OH)、KBo XX 8 I 11 (OH)、KBo III 40, 13 (OH++), KBo XVII 32, 11 (OH+), KUB XXVIII 45 (OH++)に記録されている。OH は古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板、OH+は古期ヒッタイト語の中期ヒッタイトにおけるコピー、OH++は古期ヒッタイト語の後期ヒッタイトにおけるコピーを意味する。

¹³⁾ *nu* と異なり、*ta* は古期ヒッタイト語のテキストにのみ使用され、後のテキストには現れない。*ta-az* が現れる個所は以下のとおりである (cf. Yoshida forthcoming)。KBo VI 2 III 8 (OH)、KBo XXV 13 II 10 (OH)、KBo XVII 74 II 32 (OH+), StBoT 25 Nr. 25 IV 4 (OH)、KBo XX 8 Vs. 20 (OH)、KBo XXV 34 Vs. 22 (OH-), KBo XXV 37 Rs. 8 (OH)、KBo XXV 38, 7 (OH)、KBo XXV 40, 6 (OH)、KBo XXV 65, 10 (OH)、KBo XX 18 Rs. 1 (OH)、KBo XXV 84 I 10 (OH)。OH-は古期ヒッタイト語のテキストであるが、どの時期のコピーであるかが不明の粘土板を意味する。StBoT は *Studien zu den Boğazköy-Texten* (Wiesbaden)の略。

¹⁴⁾ これに対して、*nu-uz-za* が後のヒッタイト語で *nu-za* と綴られるようになった理由は、いわゆる「簡略綴り」による。*uz* という文字は比較的画数が多いために省略されるようになったのである。

¹⁵⁾ *-za* に文小辞 *-šan* が後接する場合 ([*-ts-san*])、*-za-an* [*-tsan*]と綴られることに注意されたい。

することによって、末尾の破擦音が弱化していないことを明瞭に示すためであったと考える以外にはないであろう。za の付加によって、母音間でダブルの-zz-が得られることに注目されたい。

nu-uz-za がアナトリア祖語の*nú-ti から導かれたことは間違いない¹⁶⁾。この連続において、再帰小辞*-ti はアクセントのある短母音に先行されているために、子音の弱化規則は適用されなかった¹⁷⁾。他方、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板には、母音間でシングルの-z-がみられる例がある。それは ma-a-ni-za “when-they-(reflexive)” KBo VI 2 I 6 というシンタグマである¹⁸⁾。この ma-a-ni-za は、おそらくアナトリア祖語の*mán-oi-ti に遡ると考えられる¹⁹⁾。この連続において、*t はアクセントの落ちない母音間に位置するために弱化規則を受けた結果、後に*d になった。したがって、nu-uz-za にみられるダブルの-zz-と ma-a-ni-za にみられるシングルの-z-は、破擦化を受ける前の再帰小辞のヴァリエント*-ti と*-di のあいだにみられる対立を忠実に反映していると考えられる²⁰⁾。

以上の議論から、nu-uz-za の za は末尾の破擦音が弱化していないことを示すために付加されていることが明らかになった。この知見は、li-in-kat-ta や e-ku-ut-ta などにみられる末尾の ta も同様の理由で付加されているという見方に対して、実質的な裏付けを与えるものである。したがって、ヒッタイト語の3人称過去語尾

16) *nú という再建形については、サンスクリット語 nú、ギリシア語 νύなどを参照。また、ヒッタイト語以外のアナトリア諸語では、*-ti という再帰小辞の再建形は破擦化を受けていない。楔形文字ルウィ語-ti、象形文字ルウィ語-ti、-ri、リュキア語-ti (-di)。

17) アナトリア祖語に生じた子音の弱化規則については、Eichner (1973) および Morpurgo Davies (1982/83) に詳しい。この規則が働く環境は、アクセントの落ちる長母音の後、およびアクセントの落ちない母音間である。また、ヒッタイト語の破擦音についても、弱化と非弱化の対立があったことが、Yoshida (1998a, 1998b) で主張されている。

18) この場合、シングルの-z-が簡略綴りによるとは考えられない。なぜなら、省略されない場合に予想される iz はわずか3画の文字であるため、省略される動機がないからである。

19) *-oi という後倚辞はギリシア語 oi、サンスクリット語 te などに比定される。

20) この見方は、1999年に Würzburg で開催された第4回国際ヒッタイト学会議で発表した (Yoshida forthcoming) を参照)。*t だけでなく、*d もヒッタイト語の先史において破擦化したことは、šiu- “god” と šiyatt- “day” という形式からも支持される。詳しくは、Yoshida (2000) をみられたい。また、中動態過去語尾に付与される-ti という小辞が破擦化を蒙っていない理由については、Yoshida (2001) で論じられている。

の-*ta*に含まれる *a* は見かけだけで実際には読まれていなかったと結論付けられる²¹⁾。

4. 楔形文字ルウィ語 3人称複数過去語尾-*nta*

第2節でみたように、楔形文字ルウィ語の3人称複数過去語尾-*nta* はリュキア語の-*tel-*-*tē*に対応するので、印欧祖語の**-nto* という再建形に遡ることになる。この再建形に対して、3人称複数能動態 *mi*-動詞過去語尾**-nt* に補助母音**o* が付与されたという解釈を与えることはできない。何故なら、第3節で示したように、補助母音の存在を裏付ける積極的な根拠はないし、仮にアプリオリには不可能でないにしても**o* という補助母音は考えにくいからである。したがって、**-nto* という再建形はアナトリア祖語の早い時期にはじめからあったと考えなければいけない。さて、この再建形は印欧祖語に推定される中・受動態過去語尾と同一の形式である。楔形文字ルウィ語の-*nta* という語尾が、1人称単数過去語尾の-*ha* や3人称単数過去語尾の-*ta* とともに、中・受動態語尾に由来するという可能性はこれまでも指摘されていた²²⁾。しかしながら、それらの指摘には十全な裏付けがあるわけではなかった。この節では、アナトリア諸語の動詞体系の歴史のなかで、どのような位置づけが楔形文字ルウィ語3人称複数過去語尾-*nta* に与えられるのかを明らかにしながら、最終的には Watkins や Jasanoff が行った推定が正しいことを示したい。

アナトリア祖語の早い時期に再建し得る *mi*-動詞、*hi*-動詞、中・受動態の3人称複数過去語尾は以下のとおりである。アクセントの落ちる位置が語幹か語尾かによって、質的母音交替などをともなうヴァリエントがみられる²³⁾。

²¹⁾ 同じくヒッタイト語のスペリングを扱った研究のなかで、Kavitskaya (1999: 55⁸)はつぎのように述べている。“Melchert (1994: 176) assumes, following most recently Eichner (1975: 80) and Oettlinger (1979: 96), that the final vowel in (13') (= *li-in-kat-ta*, etc. [= K.Y.]), as well as in the other 3rd singular preterite forms, is linguistically real since the spelling *li-in-kat* would be sufficient to render /linkt/. This seems to imply yet a different type of epenthesis in word-final *obstruent* + *obstruent* clusters. At this time, I cannot offer more insight into this problem.” しかしながら、彼女は悩む必要のない問題で悩んでいるのである。何故なら、この問題に関する Melchert の解釈は誤っており、*li-in-kat-ta* に代表される形式には2次的な挿入母音が存在しないからである。

²²⁾ たとえば、Watkins (1969: 174)や Jasanoff (1988: 73)を参照されたい。

²³⁾ 以下の再建は、Yoshida (1991: 371)に部分的修正を施したものである。中・受動態に再建されている語尾については、それぞれサンスクリット語の *viśānte* “they enter”、*āsate* “they sit”、

初期アナトリア祖語

<i>mi</i> -動詞	*-ént ~ *-nt
<i>hi</i> -動詞	*-ér ~ *-r
中・受動態	*-énto ~ *-nto ~ *-ntó

これらの再建形は、アナトリア祖語内部の後の歴史に生じた2つの変化の影響を受けた。それらはともに *mi*-動詞に作用した変化である。ひとつは語末の *r が鼻音 *n* の後で消失する音変化である²⁴⁾。もうひとつは、*hi*-動詞に固有の語尾 *-ér が *-ié/ó- および *-ské/ó- という接尾辞を持つ *mi*-動詞にも広がった結果、 *-iér および *-skér で終わる *mi*-動詞がつくりだされる形態変化である²⁵⁾。これらの2つの変化を蒙った後、うえに示した3人称複数過去語尾はアナトリア祖語の後期の段階では、以下のようになった（アクセントの位置は、ここでの問題に関与しないので省略した）。

後期アナトリア祖語

<i>mi</i> -動詞	*-en ~ *-nt ~ *-er
<i>hi</i> -動詞	*-er ~ *-r
中・受動態	*-nto ~ *-nto

この状態はアナトリア諸語が祖語から分岐した時点ではなお保持されていたが、書記記録を持つどの分派諸語においてもそのままのかたちでは保たれていない。しかしながら、うえの再建形を考えることによって、分派諸語にみられる動詞体系がどのようなプロセスを経て成立したのかが無理なく理解できる。すなわち、ヒッタイト語の先史においては、中・受動態語尾はそのまま保持されたが、もともと *hi*-動詞に特有であった *-er は *mi*-動詞にも一般化され、本来 *mi*-動詞の語

duhaté “they milk”に代表される形式に継承されている。

²⁴⁾ ヒッタイト語の単数主格・対格中性の形容詞 *hūman* “all”に対する単数属格 *hūmandaš*、楔形文字ルウィ語の単数呼格 ^DU-an (= ^DTarḫuḫan < *tḫ₂ént) “Storm God”に対する単数主格共通性 ^DTarḫunza などによって、この変化が生じたことが支持される。

²⁵⁾ この形態変化を想定する根拠は、ヒッタイト語の *mi*-動詞3人称複数過去形に -ar (< *-r) ではなく、-er (< *-ér) が一般化されているという事実である。詳しくは、Yoshida (1990: 114, 1991: 365f.)をみられたい。

尾であった*-en ~ *-nt を完全に駆逐した。また、実質的には*-rにも取って代わった²⁶⁾。

これに対して、ルウィ系諸語（楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語）では、mi-動詞語尾*-en (< *-ent) が共通ルウィ語の時期に中・受動態語尾*-nto (*-nto) のヴァリエントと再解釈された結果、*-nto に取って代わられた²⁷⁾。さらにこの*-nto は、*-er (*-r) も駆逐し、3人称複数過去を表す一般的な語尾として用いられるようになった。楔形文字ルウィ語-nta、象形文字ルウィ語-ⁿta、そしてリュキア語-ⁿtel-ⁿtēという実際に記録されている語尾は、後に起こった母音変化を除けば、この*-nto を忠実に伝承している。

第2節で指摘した Eichner の見方に内在する2番目の問題点、つまりヒッタイト語で mi-動詞にも hi-動詞にも3人称複数過去語尾として-er が一般化している理由、ヒッタイト語以外のアナトリア諸語で-er に対応する語尾が欠如している理由、さらにルウィ系諸語についての一般的なハンドブックで中・受動態の3人称過去語尾がまったく提示されていない理由は、ういで示した分析によってごく自然に説明することができる²⁸⁾。

5. 楔形文字ルウィ語3人称単数過去語尾-ta

ういの第3節で、ヒッタイト語では語幹が子音で終わるか、母音で終わるかによって、語尾を表す文字が-ta と-Vt とのあいだで交替することをみた (e-eš-ta vs.

²⁶⁾ *-er による一般化を免れた例として *uemišar* “they found” などの少数の動詞がある。それらはすべて古い時期の粘土板に記録されている。

²⁷⁾ まったく同じ形態変化がリグ・ヴェーダに（さらに古ペルシア語とギリシア語にも）みられることが Jamison (1979) によって報告されている。つまり、能動態3人称複数-an が中・受動態3人称複数-n^a に置き換わっているのである。この変化はリグ・ヴェーダなどでは限られた範囲にしかみられないが、ルウィ系諸語では*-nto が完全に一般化されている。

²⁸⁾ パラー語でもルウィ系諸語と同じく、ヒッタイト語の-er に対応する3人称複数過去語尾が欠けており、-nta という語尾しか記録されていない (e.g., *lu-ki-in-ta* “divided”)。パラー語の-nta というスペリングに対して、ルウィ系諸語と同じ歴史的な解釈を与えることはもちろん可能であるが、つぎに示す別の見方も有力である。パラー語では、ルウィ系諸語の場合と違って、3人称単数過去形はつねに-Vt という語尾を持っている (e.g., *lu-ki-i-it* “(s)he divided”)。これは明らかに、本来の能動の語尾*-t を継承している。したがって、パラー語の-nta というスペリングは、3人称単数現在-ti: 3人称単数過去-t(-d) = 3人称複数現在-nti: 3人称複数過去 X という類推の比例式に基づいて、アナトリア祖語の*-en に再び歯茎閉鎖音が付与された-nt (あるいは-nd) を表しているのかもしれない。

i-e-it)。これに対して、楔形文字ルウィ語においては、子音語幹であるか母音語幹であるかにかかわらず、3人称単数過去形はつねに $-ta$ という文字で終わるため (*a-aš-ta* “(s)he was” vs. *a-ú-i-ta* “(s)he came”)、語尾末の *a* はダミーではなく、実際に発音されていたと考えられる。この $-ta$ という語尾は、リュキア語の $-tel-tē$ に対応するので、歴史的には $*-to$ という祖形に遡る。3人称複数過去語尾 $-nta$ (< $*-nto$) の場合と同じ理由から、この $*-to$ を3人称単数能動態過去語尾 $*-t$ に補助母音 $*o$ が付いたものと解釈することはできない。したがって、 $*-to$ という語尾は最初からアナトリア祖語に存在していたと考えなければいけない。すでに第4節でみたように、3人称複数過去形に再建される $*-nto$ という語尾と同じく、 $*-to$ も印欧祖語の中・受動態語尾と形式のうえで合致する。3人称複数の $*-nto$ が中・受動態に遡るのであれば、3人称単数の $*-to$ も同じく印欧祖語の中・受動態に遡る蓋然性はきわめて高いと言えるだろう。本節では、それでは何故中・受動態過去語尾 $*-to$ がルウィ系諸語において過去を表す一般的なマーカーとして用いられるようになったかという問題を考えたい。

この問題を考える際に、きわめて重要な鍵を担うと思われる言語事実がある。それは、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語のあいだで同源と考えられる *mi*-動詞には2つのグループがあるということである。ひとつは、現在形や過去形にかかわらず、3人称単数語尾の歯茎音が母音間において、 $-t$ (楔形文字ルウィ語)、 $-t-l-r$ (象形文字ルウィ語)、 $-d$ (リュキア語) という対応を示すグループ (グループ I)、もうひとつは、 $-tt$ (楔形文字ルウィ語)、 $-t$ (象形文字ルウィ語)、 $-t$ (リュキア語) という対応を示すグループ (グループ II) である²⁹⁾。

	楔形文字ルウィ語		象形文字ルウィ語		リュキア語	
3人称単数現在	I. $-ti$	II. $-tti$	I. $-til-ri$	II. $-ti$	I. $-di$	II. $-ti$
3人称単数過去	$-ta$	$-tta$	$-tal-ra$	$-ta$	$-de$	$-te$

グループ I の動詞の例としては、楔形文字ルウィ語 *a-ta* “(s)he made”、象形文字ルウィ語 *á-à+rafi*、リュキア語 *adi/edi*, *ade/ede*、グループ II の例としては、楔形文字ルウィ語 *ti-ya-da-ni-it-ti* “(s)he curses”, *ti-ya-ta-ni-ja-at-ta* などがある³⁰⁾。動詞

²⁹⁾ 象形文字ルウィ語のグループ I に属する動詞においては、語尾 $-ti$ 、 $-ta$ がそれぞれ $-ri$ 、 $-ra$ と交替するが、グループ II に属する動詞にはこのような交替がみられない。

³⁰⁾ *li*-動詞の3人称単数過去語尾については、グループ II の *mi*-動詞語尾と同じ対応がみられる。この事実に対する歴史的説明については、Yoshida (1993: 34)をみられたい。

語尾にこの2種類の対応があることは、Morpurgo Davies (1982/83: 259)によつてはじめて指摘された。グループ I の現在語尾にみられる弱化した歯茎音（楔形文字ルウィ語では母音間のシングルの *-t*、象形文字ルウィ語ではロタシズムを受けた *-r* と交替する *-t*³¹⁾、リュキア語ではアルファベットで書かれた *-d*）は、注 17) で示したアナトリア祖語の時期に生じた子音の弱化規則によつてもたらされたと考えられる。しかしながら、グループ I の過去語尾においても弱化した歯茎音が一貫してみられることは、どのように説明すればいいのであろうか。Morpurgo Davies は事実の指摘だけにとどまっておき、その理由については触れていない。

アナトリア祖語における3人称単数の *mi*-動詞過去語尾としては、子音語幹動詞では **-t*、母音語幹動詞では語末で弱化を受けた **-d* が建てられるであろう。ところが、アクセントを持つ接尾辞 **-jé/ó-* を取る母音語幹動詞の場合、過去形 **-jé-t* の **-t* は、うえで述べたように、語末に来るため弱化を受けた結果 **-d* になるが、現在形 **-jé-ti* の **t* は注 17) で示した弱化規則が適用される構造記述を満たさないために、弱化を受けない。したがって、分岐前のアナトリア祖語において、**-jé/ó-* という接尾辞を取る動詞は過去語尾 **-d* に対して、現在語尾は **-ti* で特徴付けられていたと考えられる³²⁾。しかしながら、楔形文字ルウィ語では、うへの *ti-ya-da-ni-it-ti*、*ti-ya-ta-ni-ja-at-ta* や *a-ri-it-ti*、*(a-)a-ri-it-ta* “(s)he raised (?)” に代表されるように³³⁾、一貫して *-tt-* というスペリングが用いられている。過去語尾 **-d* は何らかの2次的な変化を蒙ったに違いない。

この問題はつぎのように考えれば、もっとも容易に説明される³⁴⁾。共通ルウィ語の段階で、語末の歯茎音は消失した。この音変化は、つぎのような例によつて裏付けられる。ヒッタイト語 *melit* “mead” に対する楔形文字ルウィ語 *malli*。関係代名詞の単数中性主格・対格ヒッタイト語 *kuit* に対する楔形文字ルウィ語 *kui*、リュキア語 *ti*³⁵⁾。さらに、この変化は *mi*-動詞の3人称単数過去語尾 (**-t*、**-d*) にも作用した。この音変化の結果、語尾を持たない機能的に不透明な形式がつくられたが、この形式の機能的な位置付けを明瞭にするために、3人称複数過去形の

31) 象形文字ルウィ語には有声の *d* を含む音節文字はないため、*t* は無声歯茎音と有声歯茎音の両方を表すのに用いられていた。

32) この状況は、ヒッタイト語にかなり忠実に反映されている (e.g., *pāit(-aš)* vs. *pāizzi*)。

33) いずれも **-jé/ó-* という接尾辞で特徴付けられる動詞である。

34) Cf. Yoshida (1993: 33f.).

35) Laroche (1959: 132) を参照。楔形文字ルウィ語の単数中性主格・対格 *hās (-ša)* “bone” (< **h₃ost*-あるいは **h₂est*-) を考慮すれば、語末の歯茎音の消失は子音の後でも生じたと考えられる (cf. Melchert 1994: 278)。

場合と同様に、対応する3人称単数過去の中・受動態語尾(*-to、*-do)が付与されるようになった。以上は、すべて共通ルウィ語の時期に生じた変化である³⁶⁾。それぞれの動詞に対して中・受動態語尾*-to と*-do のどちらが選ばれるかについては、つぎの類推のプロポーシオンが作用したと考えられる。

*-nti (3人称複数現在) : *-ti (3人称単数現在) : *-di (3人称単数現在)
 = *-nto (3人称複数過去) : X₁ (3人称単数過去) : X₂ (3人称単数現在)
 X₁ = *-to、X₂ = *-do

すなわち、過去語尾が歯茎音が弱化していない*-toをとるか、あるいは弱化した*-doをとるかは、対応する現在語尾に含まれる歯茎音によって決定されるのである。うえて述べたグループ I の動詞では現在形でも過去形でも弱化した歯茎音がみられるのに対して、グループ II の動詞では弱化していない歯茎音が一貫しているという事実は、以上のようにして説明される。3人称複数過去の場合と同じく、ルウィ系諸語の3人称単数過去において能動態と中・受動態の対立がみられないのは、中・受動態語尾が一般的な過去のマーカーとして用いられるようになったという歴史的事情によるのである。

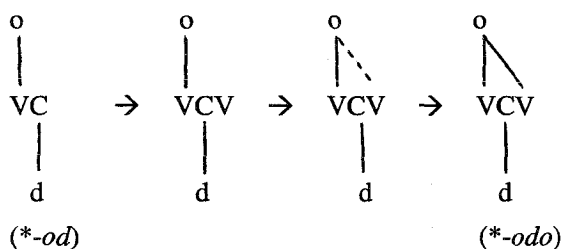
6. 結論

本稿では、楔形文字スペリングの音韻的解釈が研究者によって分かれている3つの事例に対して、記述言語学および比較言語学的な立場から分析を施した。以下に示すのが筆者自身の見解である。ヒッタイト語の子音語幹の *mi*-動詞に付く3人称単数過去語尾 *-ta* に含まれる *a* は見かけだけであり (e.g., *e-ip-ta*)、実際には発音されていなかった。*li-in-kat-ta* などの動詞にみられる末尾の *-ta* という文字は、語末子音が弱化していないことを示すために付与されたにすぎず、そこに含まれている *a* はダミーである。一方、楔形文字ルウィ語の3人称単数過去語尾 *-ta* と3人称複数過去語尾 *-nta* に含まれている *a* については (e.g., *ayita*, *ayinta*)、比較言語学的根拠から、実際に読まれていたと考えられる。しかしながら、この *a* は2次的に付与された補助母音ではなく、*-ta* と *-nta* はそれぞれ印欧祖語の中・受動態語尾*-to と*-nto を継承している。

³⁶⁾ 言うまでもなく、語末の歯茎音の脱落はルウィ系諸語にのみ働いた音変化であるため、ヒッタイト語とパラ語においては中・受動態語尾が能動態のパラダイムに組み込まれることはなかった。

補説

ルウィ系諸語では、もともとは歯茎音で終わる単音節の形式に補助母音が付与されるようになったケースもある。たとえば、後倚辞の中性主格・対格単数の代名詞である楔形文字ルウィ語-*ata*、象形文字ルウィ語-*atal-ara*、リュキア語-*ede* は、*-*od-o* という形式に遡り、補助母音の**o* が本来の後倚辞*-*od* に付与されている。しかしながら、この補助母音**o* は、音変化によって本来語末にあった歯茎音が消失することによってもたらされる機能的不透明性を回避するために、先行する母音をコピーすることによってつくられたと考えられる。多元的音韻論の枠組みでは、以下のように図示される。



参考文献

- Eichner, Heiner. 1973. "Die Etymologie von heth. *mēhur*." *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 31. 53-107.
- . 1975. "Die Vorgeschichte des hethitischen Verbalsystems." *Flexion und Wortbildung (Akten der V. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, Regensburg, 9. - 14. September 1973)*, ed. by Helmut Rix. 71-103. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Greene, David. 1956. "Gemination." *Celtica* 3. 284-289.
- Jamison, Stephanie. 1979. "Voice Fluctuation in Rig Veda: Medial *-anta* in Active Paradigms." *Indo-Iranian Journal* 21, 149-169.
- Jasanoff, Jay. 1988. "The Sigmatic Aorist in Tocharian and Indo-European." *Tocharian and Indo-European Studies* 2. 52-76.
- Kager, René. 1999. *Optimality Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kavitskaya, Darya. 1999. "Vowel Epenthesis and Syllable Structure in Hittite." *Proceedings of the Tenth Annual UCLA Indo-European Conference (May 21-23, 1998)*, eds. by Karlene Jones-Bley et al. 49-64. Washington, D.C.: Institute for the Study of Man.

- Kimball, Sara. 1999. *Hittite Historical Phonology*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Kronasser, Heinz. 1956. *Vergleichende Laut- und Formenlehre des Hethitischen*. Heidelberg: Carl Winter.
- Laroche, Emmanuel. 1959. *Dictionnaire de la langue louvite*. Paris: Librairie Adrien-Maisonneuve.
- Lindeman, Fredrik Otto. 1965. "Note phonologique sur hittite *eku*- 'boire'." *Revue hittite et asianique* 23. 29-32.
- Melchert, H. Craig. 1992. "Relative Chronology and Anatolian: The Vowel System." *Rekonstruktion und Relative Chronologie (Akten der VIII. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, Leiden, 31. August - 4. September 1987)*, eds. by Robert Beekes, et al. 41-53. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- . 1994. *Anatolian Historical Phonology*. Amsterdam: Rodopi.
- . 1997. "Syncope and Anaptyxis in Hittite." *Sound Law and Analogy: Papers in Honor of Robert S. P. Beekes on the Occasion of his 60th Birthday*, ed. by Alexander Lubotsky. 177-180. Amsterdam: Rodopi.
- Morpurgo Davies, Anna. 1982/83. "Dentals, Rhotacism and Verbal Endings in the Luwian Languages." *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 96. 245-270.
- Oettinger, Norbert. 1979. *Die Stammbildung des hethitischen Verbuns*. Nürnberg: Verlag Hans Carl.
- Pedersen, Holger. 1938. *Hittitisch und die anderen indoeuropäischen Sprachen*. København: Levin & Munksgaard.
- Watkins, Calvert. 1969. *Indogermanische Grammatik III/1*. Heidelberg: Carl Winter.
- Yoshida, Kazuhiko. 1990. *The Hittite Mediopassive Endings in -ri*. Berlin: Walter de Gruyter.
- . 1991. "Reconstruction of Anatolian Verbal Endings: the Third Person Plural Preterites." *The Journal of Indo-European Studies* 19. 359-374.
- . 1993. "Notes on the Prehistory of Preterite Verbal Endings in Anatolian." *Historische Sprachforschung* 106. 26-35.
- . 1998a. "Hittite Verbs in -Vzi." *Acts of the IIIrd International Congress of Hittitology (16-20 September 1996, Çorum, Turkey)*, eds. by Sedat Alp et al. 605-614. Ankara: Grafik, Teknik Hazırlık Uyum Ajans.

- . 1998b. “Assibilation in Hittite.” *Proceedings of the Ninth Annual UCLA Indo-European Conference (May 23-24, 1997)*, eds. by Karlene Jones-Bley et al. 204-235. Washington, D.C.: Institute for the Study of Man.
- . 2000. “The Original Ablaut of Hittite *šiyatt-*.” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 60. 175-184.
- . 2001. “On the Prehistory of the Hittite Particle *-ti*.” *Indogermanische Forschungen* 106. 84-93.
- . forthcoming. “Hittite *nu-za* and Related Spellings.” To appear in *Acten des IV. Internationalen Kongresses für Hethitologie (Würzburg, October 4-8, 1999)*.

Interpretation of Cuneiform Spellings: Three Cases

Kazuhiko YOSHIDA

Abstract

There are a number of intrinsic deficiencies in the cuneiform syllabary for writing Hittite and other Anatolian languages. The syllabary can directly represent only single initial or final consonants and internal clusters of two consonants within words. It is, however, impossible for scribes to render initial or final consonant clusters or internal clusters of three or more consonants without using empty vowel signs. Linguistic interpretation of these vowels is not always easy because consonant clusters may potentially be broken up by prothetic, epenthetic or epithetic vowels.

The 3 sg. active preterite endings of the *mi*-conjugation, when attached to the consonantal verb stem, offer a case in point; e.g., Hittite *e-ip-ta* '(s)he seized', Cuneiform Luvian *a-aš-ta* '(s)he was'. The 3 pl. active preterite ending in Cuneiform Luvian such as *a-ú-i-in-ta* 'they came' also presents a case of the problem.

As for the Hittite 3 sg. ending *-ta*, the final *a* therein is graphic because the extra *-ta* sign in e.g., *li-in-kat-ta* '(s)he swore' (never spelled ***li-in-ka-at*) is used to indicate an unlenited quality of the final consonant. On the other hand, comparative evidence speaks for the reality of the vowel included in the Cuneiform Luvian preterite 3 sg. ending *-ta*, whether attached to consonantal stems (e.g., *a-aš-ta*) or vocalic stems (*a-ú-i-ta* '(s)he came'), and 3 pl. ending *-nta* (e.g., *a-ú-i-in-ta*). Neither of the endings has a non-etymological prop vowel, but they both continue the Proto-Indo-European mediopassive endings **-to* and **-nto*.